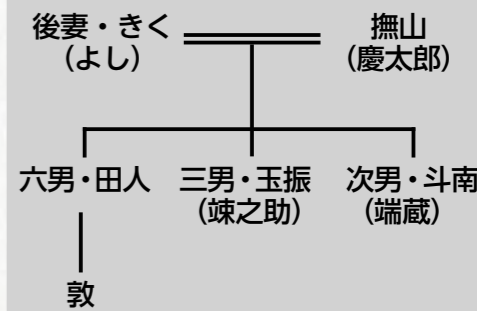


其の三 中島撫山 ぶざん



1829~1911

中島家略系図



中島家と久喜

中島家が久喜市にゆかりを持つに至った背景には、江戸時代、久喜に「遷善館」という教育機関があったことが挙げられます。この「遷善館」で講義をした学者・亀田鵬斎・綾瀬親子は、敦の祖父・撫山の師筋にあたります。

久喜で漢学・国学を

撫山（慶太郎）は、1829年に江戸で生まれました。生家は日本橋新乗物町（現東京都中央区日本橋堀留町）で、武家や大名に駕籠を納める乗物師という商家でした。慶太郎は、29歳まで家業に従事しましたが、明治維新に伴い、揺れ動く江戸を避けて、師筋との由縁があった久喜町に移り住みました。1873年には、

久喜本町で私立学校「幸魂教舎」を開きました。

以後、撫山は漢学や国学を地域住民に教え、その門弟は数千人にも及びました。1911年に83歳で亡くなるまで、教育の重要性を説き、教育を通じて久喜地域の近代化の礎を築きました。

そして、撫山の息子たちもまた、父の背中を見て学問を深めました。



中島撫山筆「不為言揚」扁額 (1909)

篆書で刻まれた文字は「ことあげせず」と読み、「ことばに出して論ずることを行わない」ことを意味します。1909年に久喜新町に転居した際の作品と推測されており、これから隠居生活に入るという意味を示していると考えられています。

光明寺

撫山が眠る墓
墓地の一角に、撫山の墓があります。
(久喜市本町1-9-56)



中島敦 案内板

敦を顕彰して作られた案内板が、久喜駅西ロータリーの一角等に設置されています。
(久喜・中島敦の会により設置)



撫山中島先生終焉之地碑

撫山と敦が過ごした中島家の住居跡地
1873年、撫山は私立学校「幸魂教舎」を久喜本町宅に開き、1909年にこの場所に移築・新築しました。
(久喜市久喜中央、個人所有)



近くには中島敦の記念碑や案内板も▶

歩いて回れる！
中島家
ゆかりの地
マップ



其の参 中島斗南 1859~1930

斗南（端蔵）は撫山の次男として、1859年に生まれました。幼少より父・撫山の教えを受け、1882年に「言揚学舎」（「幸魂教舎」を改称した学舎）の舎主を引き継いだとされます。1893年には同志の宮内翁助とともに、久喜に私立専門学校「明倫館」を開き、学問を受ける機会が少なかった農村地域のために奔走しました。

斗南は若い頃から優秀で、漢詩や小説の創作、外国文学の翻訳なども行っており、文才もありました。また、斗南は敦の伯父にあたり、敦は斗南を題材に「斗南先生」という作品を残しています。敦は自分と斗南の気質が似ていることを自覚していたようで、作中では斗南の性格や思い出が多く語られています。作中で「利根川べりの田舎」から届いた斗南のはがきが登場しますが、この「田舎」が久喜のことを指しています。

支那分割の運命 (1912)

斗南の著作で、「斗南先生」の作中にも登場します。



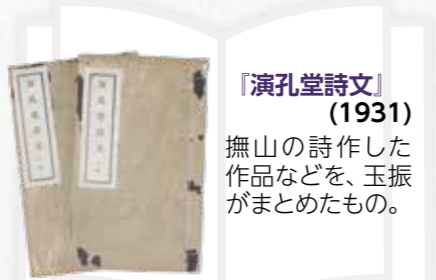
其の四 中島玉振 1861~1940

玉振（諱之助）は撫山の三男として、1861年に生まれました。兄・斗南の後を継いで1885年に言揚学舎の舎主となった後、明倫館にも出講しました。その後中国に渡り、大陸の歴史研究等を進めました。父・撫山や兄・斗南の作品などをまとめ、中島家の歴史を後世に残す仕事を行い、最期は久喜町で過ごしました。

中島敦の作品「斗南先生」では、「お髯の伯父」として登場しています。

演孔堂詩文 (1931)

撫山の詩作した作品などを、玉振がまとめたもの。



久喜地域の人を育てた 中島撫山先生

市立図書館や公文書館、郷土資料館で閲覧できます。また、市立図書館の電子図書館でもご覧いただけます。購入をご希望の方は、郷土資料館または文化財保護課（鷲宮総合支所）、公文書館窓口でお求めいただけます。
(1冊100円)
文化財保護課文化財・歴史資料係 (内線231)

電子図書館はこちら▶



マンガを 発行しました!

